

フタスジチョウ

Neptis rivularis tadamiensis Higuma

【選定根拠】 大部分の生息地で生息条件が悪化

【形態】 翅表に2列の白帯があることでミスジチョウ(白帯3列)と容易に区別できる。北海道に分布しているものは、白帯の幅が広く、本州に分布するものは狭くなる。そのなかでも本県産のものはさらに狭くなり、全体に黒化傾向が強い。

【分布】 国内では、北海道、本州(東北北部と本県から関東、中部地方)に分布。国外では、ヨーロッパからシベリア、中国、朝鮮半島まで広く分布。

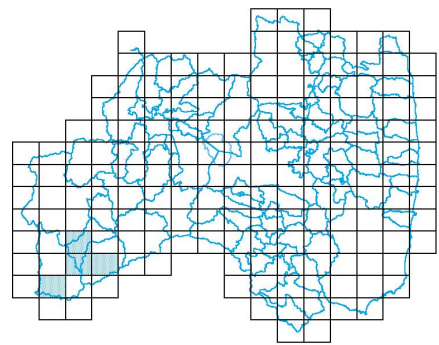
【県内の分布、生息状況】 現在のところ、館岩村と檜枝岐村に限られる。県内ではイワシモツケ、アイヅシモツケ、ホザキシモツケから幼虫が見つかっている。

【生息に影響を与えている要因】 発生地が、豪雪地帯の岩地に多く、山崩れやダム建設による影響を受けやすい。

【特記事項】 発生地は局限されているが、館岩村ではさらに局限され風穴や人家の周辺での発生もあるため、食草を含む生息環境の保護が望ましい。

【主要文献】

福田晴男・美ノ谷憲久(1986)見つけた!まぼろしのチョウ。35pp., 大日本図書, 東京。
 美ノ谷憲久・福田晴男(1984)奥只見～日光間のフタスジチョウに関する知見。月刊むし,
 (160): 20-23。



キマダラモドキ

Kirinia epaminondas Staudinger

全国カテゴリー；準絶滅危惧

【選定根拠】 大部分の個体群で個体数が減少 大部分の生息地で生息条件が悪化

【形態】 翅表の斑紋は雌雄によってかなり違っている。雄では黄褐色で斑紋は不鮮明、雌では黄斑が発達して、ややキマダラヒカゲ類やヒメキマダラヒカゲに似ている。成虫は年1回、多くの産地では7～8月に出現する。越冬態は1齢幼虫である。湿地を林床に持つ林縁やカシワの疎林などが生息地であるが、極めて局地的である。幼虫の食草はススキなどである。成虫はクヌギやコナラの樹液で吸汁する。また、一部の個体は、夏眠にはいるようである。

【分布】 国内では北海道、本州、四国、九州に分布するが局地的。国外では朝鮮、満州、アムールに分布する。

【県内の分布、生息状況】 県内では磐梯山周辺と阿武隈山地で採集されている。産地は極めて局地的で、最近の記録は、いわき市と北塩原村だけである。猪苗代町では見られなくなってしまったが、その理由としては別荘地造成などが考えられる。本種の生息には極めて微妙な条件を必要とするらしく、大変よく似た環境でもほとんどの地域で本種は生息していない。成虫は7月下旬から発生する。

【生息に影響を与えている要因】 森林伐採

【特記事項】 本種は生態的にも不明な点が多いため、現存する発生地を、環境ごと保全することが望ましい。

【主要文献】

富田國男(1992)裏磐梯のキマダラモドキ。ふくしまの虫,(10): 30。
 郡司正文(1998)いわき市川前町におけるキマダラモドキの観察について。ふくしまの虫,
 (17): 16-17。
 福島大学生物学研究会動物班(1976)弁天山における土壤動物と昆虫類。福島大学教育学部生物研究会会報,(31): 15-34。

